

学生記者の

百草園 多摩ぶらり散歩 7

中央大学の周辺には、さまざまな史跡をはじめ、豊かな自然やお楽しみスポットが数多くある。でも、意外と気づいていなかったり、知っていてもなかなか行くチャンスがなくて、いつも素通りという人が多いのではないだろうか。そこで学生記者がお薦めスポットを紹介する。題して『学生記者の多摩ぶらり散歩』。はたして、何やら新発見がありますでしょうか。

今も多くの自然が残る多摩丘陵。その一角にあり、四季折々の美しい景観で訪れる人々の目を楽しませてくれるのが、今回紹介するスポット、京王百草園だ。

百草園は、江戸時代に、小田原城主大久保候の室、寿昌院殿慈岳元長尼が再建した松連寺の庭園。現在は京王電鉄の所有となっている。「百草」は、周辺が草深い土地であったことからきている名だという。

季節代表する草花が樹生 関東でも有数の梅の名所

園内には季節を代表する草花が樹生し、ここに来れば、春夏秋冬、日本の四季を味わうことができる。とくに約800本植えられている梅は見事



板書きされた百草園の案内板

で、一本の木に紅白両方の花弁をつける「思いのまま」などの珍しい品種もあり、関東でも有数の梅の名所として知られている。新緑の季節を迎え

た5月の初め、記者は京王百草園を訪れた。

京王線百草園駅を下車して、案内板に従いながら、街道脇の細く急な坂を上って行くこと約10分。道の右手に正門が見えてきた。門をくぐると石造りの階段が続き、左右には訪れた人を迎えるように白いシヤクナゲの花が咲いていた。新緑の香りが芳しい。



旧松連坂のかんばん。坂道がきつい。

受付で入園料300円を払って散策をスタート。石段を少し登ると左手が小さな広場になっており、中央に石碑が立っていた。若山牧水の生誕百周年を記念する歌碑である。

百草園は江戸、明治を通して多くの文人墨客が



若山牧水の歌碑

訪れた場所でもある。江戸時代には大田南畝、明治時代には若山牧水、北村透谷、徳富蘆花、田山花袋などが訪れ、それぞれに庭園の自然を愛でた。



入口の階段

明治時代の代表的な歌人で、早稲田大学に在学中、幾度もここを訪れた若山牧水は、この地で恋人小夜子と過ごした思い出を歌に詠み、歌集を編纂、歌人としての名声を得たという。

「小鳥よりさらに身かるくうつくしくかなしく春の木の間ゆく君」

石碑に刻まれた歌を読んでいると、二人のいる当時の情景が思い浮かんでくるようだ。



歌碑

優雅な藤棚にうつとり 池の畔に松尾芭蕉の句碑

歌碑を過ぎて、鬱蒼とした草木の中、石段をさらに登っていくと出店が並ぶ大きな広場に出る。

ここにあるのは「松連庵」だ。奈良時代に築えたという松連寺の跡地に佇む松連庵は、日本庭園の風景に溶け込んだ、茅葺きの趣深い草庵。中はお食事処となっており、よもぎソバや甘酒、梅シャーベットなどが売られている。記者はソバに目がな



芭蕉天神

いが、「今は散策の途中」と、ソバを食べたい欲求をぐつと我慢。縁側に腰を掛け、水筒のお茶でどの渴きを潤した。

縁側に腰を掛けると、眼前に大きく枝をひろげた「寿昌梅」が目を惹く。「寿昌梅」は、寿昌院殿慈岳元長尼が、松連庵を再建した際に自ら植樹したと伝えられる、樹齢300年を越す梅の大木である。2〜3月の早春の時期には、梅の花が咲き誇り、見事な景観となる。

松連庵の裏手には、心字池がある。池を臨んだ光景はまさに日本庭園といった雰囲気。池を横切る小道には藤棚があり、仰向くと、ノダナガフジが咲いていた。うす紫色の花びらをつけた房が頭上一面に長く垂れさがる様子は、優雅で幻想的な眺めである。記者も思わず足を止め、見入ってしまった。

池を覗くと、水面一体になにやら黒い物体がうごめいている。よく見ると、小さなオタマジャクシの大群であった。静かでひっそりとした池の周りを歩いていると日本庭園の趣深さがいつそう身にしみて感じられる。池のほとりには、松尾芭蕉の句碑が2基立っていた。江戸の俳諧師であった彼もまたこの地を訪れたのであろうか。池のそばには、秋田杉の無垢材を使用して造られた本格的な茶室、三椏庵もある。申し込めば、茶会、句会、歌会などを開くことができる。

坂多く、休みながら散策 四季折々に楽しめる景観

園は丘陵地に造られているため、どこも坂道ばかりで、石段を登りながらの散策はなんとも疲れ。所々にあるベンチやあずまやなどで休憩を取りながら、頂上にある見晴らし台までやって来た。ここからは多摩の街並みが見渡せ、天気が良けれ



ば、遠く都心の高層ビル群まで眺めることができる。

四季折々の景観を楽しむことができる百草園。早春には紅梅・白梅、椿などが咲き誇り、春になると桜やツツジ、カタクリなどが顔を見せる。5、

6月には藤やアジサイ、初夏の緑が美しく、秋になり紅葉の時期を迎えると、紅葉や銀杏が咲き乱れ、赤や黄色が園内を埋め尽くす。冬に雪化粧をした園内に訪れるのもまた風流である。また、季節に合わせて、「梅まつり」、「新緑祭り」、「紅葉まつり」などの催しものも行われている。

あずまや

季節に応じて様々な顔を見せてくれる京王百草園。これからの時期はノウゼンカズラや百日紅、夏咲きの三野草などが見ごろだそう。ぜひ一度、豊かな自然に囲まれたこの景勝の地を訪れてみてはいかがだろうか。

京王百草園は、入園料大人300円、小人100円。開園時間は午前9時～午後5時。水曜は定休日。
(学生記者 廣瀬功一 文学部3年)

